

Title	ビルマ戦線と憲兵の諜報活動(1945年7月): シッタウン河突破作戦における石渡憲兵軍曹の証言記録
Sub Title	The intelligence of Japanese military policeman in Burma War, July, 1945
Author	遠藤, 美幸(Endo, Miyuki)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2011
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.104, No.2 (2011. 7) ,p.293(141)- 320(168)
JaLC DOI	10.14991/001.20110701-0141
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20110701-0141

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究ノート

ビルマ戦線と憲兵の諜報活動 (1945 年 7 月)

——シットン河突破作戦における石渡憲兵軍曹の証言記録——

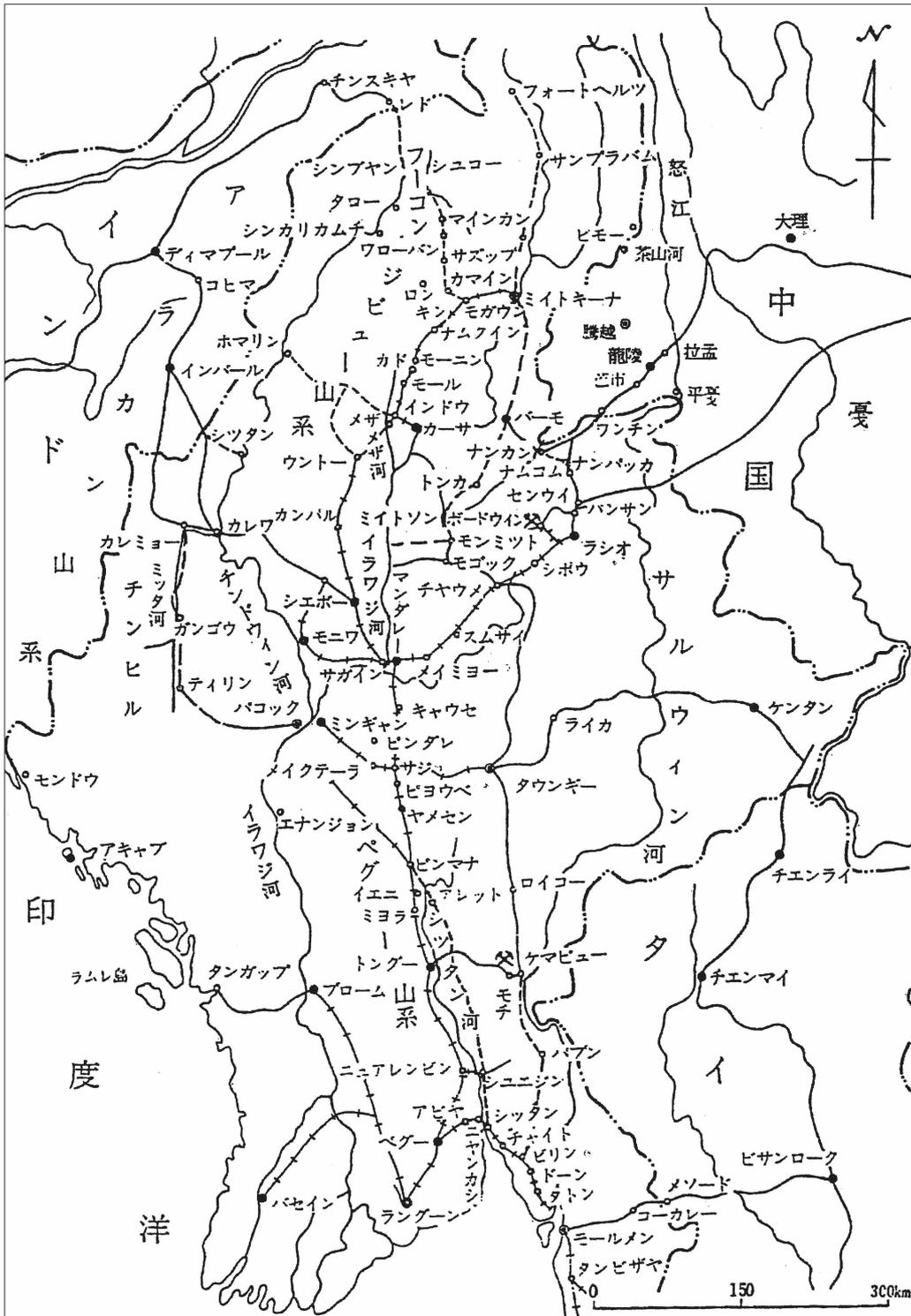
遠藤 美幸

(初稿受付 2010 年 12 月 8 日、
査読を経て掲載決定 2011 年 5 月 26 日)

【ビルマ戦線の略年表】

1940 年 11 月	ビルマ工作機関 (南機関) の設置	4 月 22 日	トンゲー会戦の敗戦
12 月	ビルマ独立義勇軍結成	4 月 23 日	ビルマ方面軍司令部のラングーン放棄 (モールメンへ)
1941 年 12 月 8 日	アジア太平洋戦争開始	5 月 2 日	連合軍のラングーン占領
1942 年 3 月 8 日	ラングーン (ヤンゴン) 占領	7 月-8 月	シットン河突破作戦
5 月下旬	ビルマ援蒋ルートの遮断	7 月 20 日	マンダレー街道突破作戦開始
1943 年 2 月頃	連合軍反攻の兆し (ウインゲート空挺部隊)	8 月 15 日	終戦
1943 年 3 月	インド工作機関 (光機関) の設置	1947 年 1 月	ビルマ独立協定調印
1944 年 3 月-7 月	インパール作戦	7 月 19 日	アウン・サン首相暗殺
5 月 19 日	連合軍のミートキーナ占領		1. はじめに
9 月	断作戦 (ビルマルート遮断作戦) 開始 拉孟 ^{ちよう} 守備隊全滅 (9 月 7 日), 騰越 ^{とうえつ} 守 備隊全滅 (9 月 14 日)		ビルマ戦線は、1942 年 1 月より終戦までの 3 年 7 ヶ月の間、ビルマ全域及びインド、中 国雲南省、タイ北部を含む広大な戦域で展開 した。1943 年 3 月に創設された日本のビルマ 方面軍は、合計約 33 万の兵力をこのビルマ戦 線に投入した。しかし、兵力、武器、弾薬、糧 秣において優勢な英米中連合軍を前に、日本 軍は敗退を余儀なくされた。約 19 万人の戦 死者を出し、その約 8 割は、マラリア、赤痢、
12 月末	イラワジ会戦		
1945 年 2 月	メイクテラー会戦		
3 月 27 日	ビルマ国軍の抗日蜂起		

図1 ビルマ全図



出典) 田中博厚『ビルマ作戦回想録——第33軍情報参謀の祈状』文游社, 2002年。

脚気、栄養失調などが死因であった。日本軍の無謀な作戦計画と補給無視による戦力の枯渇が主な原因である。

1945年4月23日、ビルマ方面軍（森）は、最後の防衛線であったトンゲー会戦での敗退（4月22日）を機に、ラングーンを急きょ放棄してモールメンへ撤退した⁽¹⁾。この結果、ベンガル湾方面で戦闘していた第28軍（33,000名）、また、ラングーン防衛部隊の敢威（敢為）兵団（3,400名）も撤退が遅れ、退路を英印軍に阻まれて共にペゲー山系内に取り残される結果となった。6月16日、ビルマ方面軍の命令（電報）は第28軍（策）を通じて敢威兵団に届いた。「策はペゲー山脈を徹してマンダレー街道を突破し、シッタン河に向かい、その河を強行渡河して、モールメンへ転進するつもりだから、一緒に行動するために敢威兵団は策の司令部の位置にこい⁽²⁾」という内容であった。敢威兵団の菊地重規参謀は、「兵団はペゲー山脈東麓道を北進し、ニューアレンビン西北方

へ移動、そこからシッタン河へ向うつもりにつき、ご了承をこう」と松井秀治兵団長の承認を得て返電した⁽³⁾。方面軍からラングーンに置き去りにされた敢威兵団は第28軍（策）の指揮下に入ったが、英印軍による監視と追撃の中、独力でマンダレー街道を突破し、雨期のシッタン河を渡るという困難極まる退却戦を強いられたのである⁽⁴⁾。

菊地参謀の手記には、敢威兵団3,400名のマンダレー街道突破日は1945年7月20日夜半と決定し、ニューアレンビン北方4キロの正面で、兵団を3縦隊に区分して奇襲突破を計画したとある⁽⁵⁾。これは「シッタン平地作戦」と呼ばれ、この作戦は7月16日から18日に沖元憲兵隊の石渡憲兵軍曹が決死隊となって収集した敵状情報を根拠に、敢威兵団上層部で策定された作戦であった。石渡は兵団3縦隊の中で、司令部のある中央縦隊と行動を共にし、石渡の持ち帰った「情報」が、中央縦隊のシッタン平地作戦の完遂を決定付けたので

(1) ビルマ方面軍司令官木村兵太郎中将は1945年4月23日夕、ラングーンを脱出しモールメンに向かった。松井秀治少将は回想録に、「私は方面軍司令官以下が飛行機で脱出したことを後で知りすぐに警備兵を司令部に派遣したが、司令部の跡は乱雑をきわめており、功績名簿の類もそのまま残されていた。恩賜のタバコも住民が入りこんで勝手に喫っていた。ラングーン防衛司令官であった私に何も言わずに飛び出して行ったことをこころから憤慨した。」と記している（戦史叢書『シッタン・明号作戦』防衛庁防衛研修所戦史室、1969年、237-238頁）。敢威兵団司令部は最後までラングーンに踏みとどまり、各部隊の撤退を見とどけるために、ラングーンを退去したのは、4月28日の夕方であった（菊地重規『中国ビルマ戦記』図書出版社、1979年、269-270頁）。

(2) 菊地前掲書、287頁。

(3) 同上。

(4) 第33軍（昆）は、7月上旬頃から、ペゲー山系から敵中突破する第28軍を救援するために、第18師団（菊）と第53師団（安）を指揮して、第28軍のペゲー山系シッタン正面において攻勢を取り、この方面に英印軍を吸引し牽制する作戦を展開した。第33軍による第28軍の救援作戦については、第33軍の田中博厚情報参謀の手記を参照されたい（田中博厚『ビルマ作戦回想録——第33軍情報参謀の祈状』文游社、2002年、247-254頁）。

(5) 菊地前掲書、289頁。

ある。一方で、英印軍に関する正確な情報がないままにマンダレー街道を強行突破した海軍深見部隊 1,200 名は、英印軍戦車の攻撃を受けて大きな被害を出した。このように、石渡の敵状情報は敢威兵団 3,400 名の将兵の生死を左右する極めて重要なものであったと考えられる。

しかしながら、公刊戦史においては、シッタン河突破作戦の記載はおおむね簡略的で、中央縦隊に関しても「敵に発見されることなく予定通り、20 日夜半にマンダレー街道を突破し、22 日夜から 24 日にかけて、民船と筏を併用してモーコ付近でシッタン河を渡った」と記載され、作戦完遂にあたって憲兵の諜報活動については一語も触れられていない⁽⁷⁾。一方で、敢威兵団の菊地重規参謀は手記の中で、シッタン河突破作戦における沖元憲兵隊の諜報活動について以下のように記述している。

「わたしはかねて沖元憲兵隊長に命じて、将来のシッタン河突破作戦に備え、ペギーおよびその北方地区の兵要地誌を調査させていたが、優秀な曹長や軍曹からなる調査隊が胴衣（ロンギ）とシャツですっかりビルマ人になりすまし、巧みなビルマ語で現地人を使い、着々情報を集めてくれつつあった。わたしは、がんらい憲兵は好きでなかったが、このビルマの若い憲兵たちには好意を感じた。彼

らの目にはにごったものがなかった。本当にビルマ人を理解し愛しているように見えた。⁽⁸⁾」

ここに書かれている憲兵軍曹に石渡喜一憲兵軍曹も含まれていた。このように菊地参謀は、シッタン河突破作戦の策定に貢献した憲兵隊の功績を評価しながらも、実際の憲兵らの諜報活動の内実は明らかにしていない。それは秘密戦ゆえに、生存者の証言以外に知る術がないからである。

本稿の第一の課題は、石渡憲兵軍曹の証言を基に、先行研究では全く触れられていない、シッタン河突破作戦中の「シッタン平地作戦」における石渡憲兵軍曹の諜報活動を具体的に詳述し、敢威兵団 3,400 名の将兵の命運を左右した秘密戦の全貌を明らかにすることにある。「シッタン平地作戦」とは、シッタン河を渡河する以前に、マンダレー街道の突破とシッタン河まで続く広大な湿地地帯を英印軍に発見されることなく行軍するための退却戦を意味する。

ところで、諜報活動の自家本元といえば、陸軍特務機関の陸軍中野学校出身者による秘密戦が挙げられよう⁽⁹⁾。ビルマ各地にも数百人の特務機関員が秘かに放たれ、「姿なき戦い」が活発に展開された。例えば、1944 年頃、およそ 200 名の光機関員がビルマ各地で活動していたと言われている⁽¹⁰⁾。光機関とは、1943 年 3

(6) 前掲書『シッタン・明号作戦』、473 頁。1945 年 7 月 31 日に単独で突破を試み、英印軍の集中攻撃を受けて、総計約 1,200 名の海軍部隊は大損害を受けた。

(7) 同書、471 頁。

(8) 菊地前掲書、284 頁。

月に岩畔機関から光機関と改め結成された日本陸軍の特務機関で、主に北ビルマを拠点にインド工作を展開し、チャンドラ・ボースのインド独立運動を指導、支援したことで知られている⁽¹¹⁾。石渡憲兵軍曹は、北ビルマのバーモ付近での諜報活動の最中、中野学校出身の光機関員小野憲一少尉に遭遇し、カチン族の諜報及び宣撫工作を共に実施した。また、ビルマにはもう一つ、ビルマ工作を目的にした南機関が存在したが、両者は工作目的を異にする別個の特務機関である。とは言え、共に機関員の多くが中野学校出身者であった点は付記しておきたい⁽¹²⁾。日本近代史家の山本武利⁽¹³⁾

によれば、ビルマでは光機関は防諜よりも、積極的な諜報、つまりスパイ工作に重点を置き、防諜は専ら憲兵に委ねていた⁽¹⁴⁾。1944年頃の戦局の激化に伴って、英軍の現地住民を使ったスパイ活動が活発化し、これを取り締まる憲兵の防諜活動が強化され、結果として親英的住民に対する憲兵の過度の暴力、拷問、虐殺行為が頻発した⁽¹⁵⁾。憲兵には国内外を問わずに違法な思想や行為を取り締まる法的な権力が付与されていたため、占領地では憲兵に防諜任務を一任する傾向があったことは否めない。それゆえ、一般的に警察権力を有する憲兵は現地住民や日本軍将兵からも「疎まれ恐れら

-
- (9) 中野学校は、1938年3月の創立から終戦の廃校まで、わずか8年で2,500名余の卒業生を輩出し、秘密戦士の養成と秘密戦の研究を戦時中に目指した特務機関学校である。秘密戦とは、武力戦と併用されるか、あるいは単独で行使される戦争手段であって、諜報、謀略、防諜なども含む（加藤正夫『陸軍中野学校の全貌』展転社、1998年、12-13頁）。特務教育の詳しい内容は、丸山静雄『中野学校——特務機関員の手記』平和書房、1948年、8-15頁を参照。とくに占領地行政学（政治、経済、思想、文化、民族）は、占領地の住民を懐柔宣撫し、対日協力させるため、各民族の特性、風俗、習慣、言語を学ぶものであり、少数民族の多いビルマを植民地化する策として重要視された。
- (10) 1944年10月6日付のOSS（アメリカ戦略諜報局、CIAの前身）レポートによると、光機関の各部局、支部、部隊などの人員は208名であり、磯田機関長は、赴任時機関員が200名ぐらいいたと回想している（山本武利『特務機関の謀略——諜報とインパール作戦』吉川弘文館、1998年、54頁）。
- (11) 光機関結成時の機関長は山本敏大佐であったが、1944年1月7日に、第22師団長であった磯田三郎中將は南方遊撃隊司令官兼光機関長に就任したことにより、山本大佐は機関長から参謀長となった。3月のインパール作戦開始前に当たって、インド国民軍、チャンドラ・ボースと日本軍の円滑な連携を図ることが光機関長磯田の任務であった。光機関の組織と役割については、山本前掲書、50-56頁を参照されたい。山本によると、OSSのハーバート・S・リットル中佐は、1943年12月30日付発行の光機関ビルマ支部「月報12月号」のマイクロコピー版をイギリス諜報機関より入手した。これはアメリカ公文書館に保存されている数少ない日本語の光機関関係の第一次資料であり、光機関の謀略の実体解明に役立っている。
- (12) 南機関は、1941年2月に鈴木敬司大佐が設立した。鈴木大佐は、アウン・サンを指導者とするビルマ独立義勇軍の若き志士らを育成し、ビルマを一時的ではあるが英国から「独立（1943年8月、バー・モオ内閣）」させ、日本軍のビルマ占領に貢献した。南機関とビルマ独立義勇軍の関係については、根本敬『アウン・サン——封印された独立の夢』（岩波書店、1996年）、101-108頁に詳しい。
- (13) 光機関の総人員500名余のうち、中野学校出身者は133名であった。他には1938年に大川周明が開校した大東亜経済調査局付属研究所（大川塾）の出身者も光機関にリクルートされ、彼らは語学や地理の知識を買われ、主に少数民族への工作に利用された（山本前掲書、165-166頁）。
- (14) 防諜とは、自国の秘密が洩れないように防ぐこと、敵国のスパイを探知することをいう。
- (15) 山本前掲書、132-136頁。

れる」存在であったと見なされている。

一方で秘密戦のプロ集団である光機関のビルマでのスパイ工作や諜報活動には、実は見るべき成果が得られなかったという評価がある。⁽¹⁶⁾ その意味においても石渡のように特務機関員さながらの諜報スパイ活動に専従し、占領地部落に単独潜入を試み、宣撫及び諜報工作に成功した憲兵がいたことは興味深い史実である。

本稿の第二の課題は、憲兵による宣撫及び諜報活動の事例から、従来の防諜任務色が濃い憲兵とは異なる憲兵像の一端を提示し、憲兵がどのように占領地住民を懐柔し、必要な情報を入手したのか、その具体的な方法を明らかにすることにある。

しかし一方で、日本軍がビルマ戦線で犯した加害事件の多くに憲兵が関与していたこともまた事実である。憲兵隊の戦友会が編纂した『日本憲兵外史』に、「ビルマ憲兵隊の悲劇」と題して、1945年3月27日のアウン・サンを指導者とするビルマ国軍の反乱が、占領地域住民の反日感情を煽動し、暴徒と化した住民は、敗走する日本軍を襲撃し容赦なき殺戮を

展開したと記されている。⁽¹⁷⁾ 住民ゲリラの出現である。この事態に対して、ビルマ方面軍司令官木村兵太郎大將は、ビルマ国軍及び住民ゲリラの撃滅を命じた。撃滅任務の主な実行者は憲兵隊であったのは言うまでもない。⁽¹⁸⁾ ビルマ戦最終段階の1945年6月以降に憲兵による住民への加害事件が頻出したのは以上のような理由からである。それゆえ、戦後ビルマ憲兵隊全員が戦犯容疑者として各地の刑務所に収監され、英軍による戦犯容疑の取調べを受けた。石渡軍曹もBC級戦犯容疑で、⁽¹⁹⁾ バンコク刑務所に1945年9月から翌年3月まで、続けてラングーン刑務所に1946年3月から翌年4月まで拘留された。英軍によるビルマ裁判の主な被告対象者は、憲兵隊、光機関、鉄道部隊などの関係者であった。この裁判では、インパール作戦、ビルマ転進作戦中の住民に対する憲兵隊の嚴重処分、拷問、拷問致死、英機搭乗者の処刑事件などを扱った。⁽²⁰⁾ 全国憲友会連合会が発行した『日本憲兵正史付録』所収の戦争裁判概見表から、ビルマ裁判のビルマ憲兵隊の有期刑及び死刑件数（確定）を単純にカウントしてみると、有期刑76

(16) 山本前掲書、217-218頁。光機関の工作任務の成功例としては、インド向けに光機関が実施した10のインドの多彩な言語を使ったラジオ宣伝工作が挙げられる。チャンドラ・ボースやインド国民軍への支援を求めるインドの世論形成に役立った（山本前掲書、142-143頁を参照）。

(17) これまで各地で叛乱軍や住民ゲリラによって殺害された日本軍将兵は4,000人以上で、この中で憲兵は90名が殺された（全国憲友会編『日本憲兵外史』1983年、1093頁）。

(18) 前掲書『日本憲兵外史』、1093頁。

(19) 戦犯裁判は、A級戦犯の侵略戦争の計画・遂行などの「平和に対する罪」、B級戦犯の国際軍事裁判所条例に規定された「通例の戦争犯罪」、C級戦犯の「人道に対する罪」に分類されるが、BとCは一括してBC級戦犯として扱われている。イギリスの戦犯裁判の総括的な研究として、林博史『裁かれた戦争犯罪——イギリスの対日戦犯裁判』（岩波書店、1998年）がある。林は、イギリス裁判の特徴は、捕虜に対する犯罪と同時に植民地住民に対する犯罪を厳しく処罰し、植民地宗主国としてのイギリスの威信と信頼を回復するための裁判であったと述べている。

件、死刑 15 件であった⁽²¹⁾。同一人物が複数の事件に関与している場合を考慮しても、ビルマ裁判で憲兵隊に下された有期及び死刑件数は決して少なくないことが分る⁽²²⁾。しかしながら、石渡憲兵軍曹は戦犯容疑に一切問われることはなかった。彼が戦犯容疑を免れた理由は、憲兵でありながら後方部隊として組織的な防諜活動に従事する機会がほとんどなかったこと、常に前線にいて占領地住民を懐柔するために、可能な限り友好的な関係を築きながら、単独で宣撫及び諜報工作に従事する機会が多かったことが挙げられよう。

2. 石渡憲兵軍曹の軍歴と人物

2-1 入隊から憲兵になるまで⁽²³⁾

1919（大正 8）年 3 月 8 日、石渡喜一は北鎌倉山之内の材木屋の 6 人兄弟の末っ子として生まれた。4 人の兄もみな軍隊に入った。一人の兄は、日中戦争に従軍（歩兵第 49 連隊、津田部隊）し、すぐ上の兄は満州に赴き、シベリア抑留を経て、1947 年に復員した。1940 年 1 月、石渡は歩兵第 49 連隊（甲府）の東部第 63

部隊に入隊した。入隊して間もない初年兵の頃、「飯し上げ」の時、同じ連隊の軍曹の兄が面会に来てくれて涙が出たことを覚えている。その後、石渡は憲兵を志すが、憲兵の試験は入隊後 6 ヶ月を経なくては受験できなかったため、1940 年 9 月に憲兵試験を受験した。憲兵は本来志願制であるが、部隊で品行、成績の良い者が事実上選抜された。石渡の東部第 63 部隊では、初年兵を除く兵隊 36 名が受験し、7 名が合格した。1940 年 12 月 1 日、石渡は上等兵となり⁽²⁴⁾、12 月 10 日に中野囲町の憲兵学校に 7 期生として入校し、6 ヶ月間の憲兵教育を受けた。

2-2 内地任務⁽²⁵⁾

訓練終了後、1941 年 6 月、横浜憲兵隊横須賀憲兵分隊に配属され、陸海軍軍事警察官として任官した。横須賀憲兵分隊では、分隊の司法係（司法憲兵）となる。憲法、刑法、国防保安法、戦時刑事特別法、国家総動員法などの法律の勉強をしたが、当時は国内法が中心で国際法は除かれた。石渡は自らが従事した内地任務を 5 つ挙げた。①刑法を根拠にした

(20) 英軍によるビルマ裁判（期間 1946 年 3 月-1947 年 11 月）には、ラングーン裁判（1946 年 3 月開廷）とメイミョウ裁判（1947 年 5 月開廷）の二つの裁判がある。ラングーン法廷の事件数は 29 件、被告人 108 名で、メイミョウ法廷は事件数 11 件、被告人 18 名である（国立国会図書館法務省、平成 11 年 4A-21-6607、9 頁）。

(21) 全国憲友会連合編『日本憲兵正史付録——終戦時在職者名簿 戦争裁判概見表』1976 年、28-35 頁。

(22) 12 名のビルマ憲兵隊の憲兵が複数の事件に関与し、有期刑か死刑が確定されていることが『日本憲兵正史付録』所収の名簿より明らかになった。

(23) 石渡（現磯部）喜一の聞き取り（2010 年 3 月 19 日）。

(24) 憲兵の地位、権限、諸待遇については、瀬瀬厚『憲兵政治——監視と恫喝の時代』新日本出版社、2008 年、51-54 頁を参照。石渡によると、1944 年頃、一般兵士（上等兵）の給与が 18 円から 20 円のところ、憲兵軍曹は 25 円から 27 円ぐらいで一般兵士と比較し、給与が高かった。

(25) 石渡の聞き取り（2010 年 3 月 19 日）。

軍人及び軍属の取締り、②天皇、要人の警護（1941年9月、葉山の御用邸の警護）、③徴兵検査の立会い、④身元調査、⑤遺骨引渡し時の警備である。中でも、①の刑法を根拠にした取締りは、司法を専門とする石渡の主な任務であった。国家総動員法（1938年）下での国民徴用令（1939年）の交付は、憲兵の取締りが、民間人にも拡大、強化する法的裏付けとなった。横須賀鎮守府隷属下では、造船軍需要塞や基地の形成要員として、4万人余りが徴用され就労した。赤紙と同じような書面（白紙）が届き徴用となった者は、6日過ぎて出頭しなければ逃亡罪となり憲兵の取締りの対象となった。石渡の証言によると、当時は徴用工員の徴用忌避者や逃亡者も多かったようである。

さらに、徴用先で自ら命を絶つ者も後を絶たなかった。1942年から1943年頃、徴用工員として徴用された10代の若者たちは、独身者の詰め所である池上宿舎に入所した。この宿舎でも自殺者が多く出た。朝から晩まで海軍の軍事工場で過酷な労務を強要され、帰宅後は宿舎の大部屋に約1万人の若者が詰め込まれた。ある日、石渡は若い自殺者の検死を担当した。親元を離れて辛かったのだろう、18歳の青年が木の枝に首を吊った。自殺者は変死扱いなので、軍医の検死時に、憲兵も同席

しなくてはならない。犯罪性の有無を調査し、検死済の書面がないと埋葬ができなかった。

2-3 外地任務（ビルマ工作）⁽²⁶⁾

憲兵の外地（戦地）任務は希望制である。石渡は、憲兵として「ハクをつけるため」に外地任務に手を挙げた。1944年4月に、北九州の門司港から約150名の憲兵が、南方総軍司令部のあるシンガポールへ出航した。ところが、英軍の潜水艦の攻撃で大半が撃沈し、22隻のうち3、4隻しかシンガポールに到着できなかった。石渡ら憲兵の一行は撃沈を免れた。シンガポールに到着して1週間後、憲兵150名全員のビルマ行きが決定した。

1943年3月27日、ビルマ方面軍の創設に伴って、ビルマ憲兵隊司令部が設置され、内地や中国戦線及び満州から逐次憲兵が増派され⁽²⁷⁾た。翌年、1944年3月のビルマ方面軍の命運を賭けたインパール作戦が企図されると、ビルマ憲兵隊はさらなる増員の拡充が図られた⁽²⁸⁾。石渡が赴任した頃の占領地の憲兵組織は、憲兵司令部—憲兵隊本部—憲兵分隊—憲兵分遣隊が基本とされた。

1944年5月、石渡憲兵軍曹を含む7名が東北憲兵隊本部管轄下のバーモ憲兵分隊に赴任した。石渡の最初の任務は、カチン族の部落に潜入し、軍事拠点ミートキーナの情報収集

(26) 石渡の聞き取り（2010年3月19日）。

(27) 1943年時点でビルマ憲兵隊の総兵力は約900名となる（全国憲友会編『日本憲兵外史』1983年、1028頁）。

(28) インパール作戦の企図時、ビルマ憲兵隊はビルマ全域を東北、東南、西北、西南の憲兵隊本部に4区分した。東北憲兵隊が最大規模でメイクテラー、タウンギー、ロイレム以北がその管下に入る。4憲兵隊本部開設時がすべての面でビルマ憲兵隊の最盛期であった（前掲書『日本憲兵外史』、1029頁）。

及び宣撫工作を行うことであつた。⁽²⁹⁾次に石渡はバーモからラシオ憲兵分隊に赴任し、ミイトソン、モゴック、チョウメイを経てラシオ憲兵分隊に着いたのは、1945年正月であつた。⁽³⁰⁾この頃の北ビルマの戦況は、1944年9月の中国雲南省の拉孟、騰越各守備隊の相次ぐ全滅を機に悪化し、連合軍がビルマ援蔣ルートを再び開通させた。雲南地区での拠点を逸した第33軍(昆)司令部は、雲南の芒市から北ビルマのラシオに後退を余儀なくされた。⁽³¹⁾石渡は、ラシオの北、密林の中の第33軍司令部に戻っていた光機関の小野少尉を訪ねた。そこで思いがけず第33軍作戦参謀の辻政信大佐に声を掛けられた。「憲兵が何しに来たんだ?」と訝しがられたが、小野の指示通り「兵要地

誌の打ち合わせに来ています」と返答した。⁽³²⁾

1945年3月27日、ビルマ国軍のアウン・サンの反日蜂起は、ビルマ全土の日本軍を驚愕させた。「同胞」の反逆は、まさに青天の霹靂であつた。4月頃、石渡は、北ビルマから南部のラングーンへ反乱軍の首謀者であるアウン・サン逮捕の命を受け、急きょ沖元憲兵隊の指揮下に入った。5月初頭、石渡はラングーン陥落時に火の海と化した首都の惨状を目撃した。ビルマ方面軍のモールメンへの撤退(4月23日)直後であつたため、ラングーンの町は混乱の渦にあつた。⁽³³⁾最後の防衛線であつたペグー会戦の敗戦を機に、ビルマ各地の日本軍の大規模な退却戦が始まつた。ビルマ方面軍の後退と共に、奥地の憲兵分隊及び

(29) 1944年5月19日、ミートキーナは米中連合軍の空挺部隊に占拠され、日本軍は北ビルマの軍事拠点を失つた。ミートキーナの失陥により、日本軍はビルマ防衛作戦の拠点を北ビルマから雲南地区に移行せざるをえなかつた。北ビルマ・雲南を重点とする作戦企図から、1944年4月29日に、ビルマ方面軍編成に第33軍(昆)が創設された。ビルマの戦況及び北ビルマ及び雲南地区の作戦概要について、拙稿「戦場の社会史——ビルマ戦線と拉孟守備隊 1944年6-9月(前編)」『三田学会雑誌』102巻3号(2009年10月)97-101頁で検討している。

(30) 終戦時のビルマ憲兵隊の人員数は、将校75名、下士官740名、兵635名の総勢1450名の大所帯であつた(大谷敬二郎『昭和憲兵史』みすず書房、1966年、579頁)。石渡によれば、沖元憲兵分隊は50名ほどであつた。

(31) 敢威兵団長松井秀治少将の前任は、北ビルマ及び雲南戦線を戦区とした第56師団第113連隊長であり、松井は1944年5月頃まで拉孟守備隊の守備隊長(当時は大佐)であつた。1944年6月から9月の全滅戦闘時の守備隊長は、野砲兵第3大隊長金光恵次郎少佐であつた。

(32) 本来南方軍の指揮下にあつた光機関の小野少尉は、この時は第33軍司令部の配下であり、第33軍田中博厚情報参謀の工作班の将校の一人であつた。田中参謀の手記に小野少尉が部下の一人であつたという記述がある(田中博厚『俘囚記』〔非売品〕大秀社、1974年、42頁)。戦後、小野が石渡(現磯部)に、「実際は田中参謀より辻参謀に随分こき使われた」と告白している。

(33) ビルマ方面軍司令部の撤退後、5月2日に英印軍はラングーンを占領した。石渡の目撃証言によると、5月初め頃のラングーン川の下流では、撤退時に日本軍が油タンクに火を放つたため、直径50メートル、高さ200メートルの真紅の炎がめらめらと燃え上がり、ラングーン市街にも5、6メートルの炎が20ヵ所ほど燃えていた。日本軍は兵器所に火を放ち、無警察状態となつた町では住民の略奪が横行した。石渡は、「ラングーンの憲兵分隊の周りを大勢の住民が取り囲んで、憲兵隊が脱出したら飛び込んで物を取ってやろうと、若いビルマ人の男どもが今か今かと殺気立つていた」と証言した(2010年4月30日の聞き取り)。

分遣隊は次つぎに撤収され、1944 年末にはマ
ンダレー・ラシオ間の鉄道以北の憲兵分隊は
ほとんどが撤退した。しかも、その後は英印
軍の急激な追撃を受け、憲兵隊も指揮系統が
分断されて、軍同様にモールメンを目指して
敗走をつづけた。⁽³⁴⁾1945 年 7 月、本稿の主題で
あるシッタン河渡河前の「シッタン平地作戦」
もその退去戦の一環であり、石渡憲兵軍曹は、
英印軍の重層な包囲網から敢威兵団 3,400 名
の将兵を無事に退去させるための退路の確保
に貢献したのである。

3. 憲兵の諜報・宣撫工作の具体的な事例

石渡憲兵軍曹は、裸足にロンジー（現地服）
姿で約 1 年半に亘って、北ビルマのバーモ周辺
からマンダレーを經由しビルマ南部のペゲー
山系裾の部落まで、ビルマを南北に縦断して
諜報及び宣撫工作を行った。石渡の工作活動
について二つの事例を挙げて、その特徴を明
らかにする。⁽³⁵⁾

第一の事例は、石渡が 1944 年 5 月に赴任
したバーモ憲兵分隊配下で行ったカチン工作
（5-6 月頃）である。カチン族とは中国雲南省
から北ビルマの山岳地帯に居住する少数民族
である。戦時期は英印軍の諜報者がカチン族
の部落に潜入し、活発な宣撫及び諜報工作を
行った。石渡らはカチンの部落に英印軍がど
の程度潜行しているかを探り、またカチン族
から英印軍の兵力や武器などの軍事情報を入

手しようとした。

第二の事例は、本稿の主題である 1945 年 7
月のビルマ戦退却時のシッタン平地作戦にお
ける憲兵の敵状情報の収集である。この作戦
は、決行日が予め 7 月 20 日と決められていた
ため、石渡は 7 月 16 日と 17 日の 2 日間で諜
報任務を完遂しなくてはならなかった。責任
の重さに比べて時間的猶予のない任務であっ
た。一方で、北ビルマのカチン工作は、一月ほ
どの期間を要して占領地部落に潜入し、住民
を懐柔しながら諜報・宣撫工作を行った。カ
チン工作とシッタン平地作戦の諜報任務は、
諜報活動の目的や期間も異なる事例であるが、
二つの事例を検討することで石渡の諜報活動
の実態がより理解しやすくなるだろう。

石渡は、ビルマの各戦地で収集した情報を、
憲兵隊本部または司令部に報告する際に、情
報の確度を下記のように表示して報告書を作
成した。⁽³⁶⁾情報の確度は、甲・乙・丙で分類さ
れ、甲が最も確度の高い情報と見なされた。

確度甲 1) 自ら確認したもの

2) 聞いたもので証拠が把握できたもの

確度乙 1) 諜報員の情報

確度丙 1) 風聞（村民の噂話）…正確な事実が
迅速に伝達されている場合

2) 集落からの集団脱出…英印軍の攻
撃を事前に察知し移動する場合

3) 英印軍の伝単などの宣伝文の分析

(34) 前掲書『日本憲兵外史』、1029 頁。

(35) 石渡の聞き取り（2010 年 4 月 30 日）。

(36) 石渡による資料提供（2011 年 2 月 24 日）。

3-1 北ビルマの少数民族工作

石渡憲兵軍曹の諜報活動の方法は、現地の通訳や部下の伍長一人を伴う場合もあったが、原則として単独で行うことが多かった。軍や憲兵分隊からの食糧の補給は一切ない。石渡は「住民から食糧補給を受けなくてはならないから、住民は大事ですよ。住民に敵対的な行動を取ればすぐに敵に情報が入って襲撃されます。」と述べている。現地住民と親しくなり、寝泊りや食事の世話を受けるには、複数よりも単独の方が警戒されずに都合よかった。

石渡は住民に対して敵対心がないことを示すために、軍装一式をジャングル内に隠して、住民と接する時は拳銃1丁と手榴弾2個を隠し持ちロンジーをまとい丸腰に近い姿であった。石渡が丸腰に近い姿でいたいま一つの理由は、持ち込んだ兵器で逆襲される危険を避けるためであった。一方で、住民からいかに好意的な応対を受けても気を抜かず、部落潜入中は常に逃走経路を確保し警戒を怠らなかつた。例えばモシトワ部落での諜報活動は、この部落が英印軍陣地から500メートルと離れていなかったため、部落住民が英印軍に通報する可能性を常に視野に入れていた。石渡の任務は、モシトワの部落民から英印軍の兵力等の情報を入手することであった。石渡が身を寄せた一軒家には中年夫婦と15、6歳の娘が一人いたが、彼らは石渡を我が息子のようによつた。彼が帰宅するまで食事をせず待ち、主人は皿にある一番大きな肉の塊を手づかみで彼に与えた。石渡がマラリアに罹つた時、家人が心配して奥で寝るように勧めても、彼は雨が吹き込む戸口付近で寝ることを止め

なかつた。英印軍が逮捕に来た時、すばやく逃げられる位置を確保した。家人は石渡が日本軍の憲兵だと承知の上で、英印軍諜報者に通報するような行為はしなかつた。諜報任務における石渡の最大の武器は、彼の「人間性」にあつたかもしれない。

時には、班単位で諜報活動に当たつた。石渡がバーモ方面へ派遣された時、中国戦線から派遣された北本憲兵伍長と西岡憲兵伍長の2班がカチン族の部落に潜行し、すでに北本伍長はカチン族20名を懐柔していた。石渡は西岡班に入った。着任早々、工作物であるアヘンを入手するためにある現地住民の一軒家に向つた。アヘンはネトネトした味噌のような形状で新聞紙に包まれていた。石渡はカチン族のコンシンという小さな村で、陸軍中野学校出身の小野憲一少尉（光機関）と接触した。小野少尉は工作物として塩、鉛筆、日本の絵本などを持っていて、石渡に塩などの食糧を与えた。小野少尉は単独行動で私兵を持たない。石渡は小野にミートキーナの情報を渡した。憲兵軍曹と光機関の少尉が生活を共にしながら、同地域一帯の諜報及び宣撫工作を一致協力して行つていた。

ビルマ族の宣撫工作については、石渡は、ビルマ族のシュという部落で、住民の男女100名ぐらい集めて演説した。演説で肝心なことは、日本軍がビルマで戦う意味を住民に分りやすく説明することである。住民への演説では、最初に必ず話さなければならないことばがあつた。

「ビルマはインガリー〔英国の蔑称〕の

ものではない。ビルマの大地、物資はビルマのものだ。ビルマは独立しなくてはならない。そのために我々にも親、兄弟はいるけど、血を流して戦うのは、ビルマの独立のためである。」〔 〕筆者付記

最後に、「日本とビルマは仏様同じ（ジャパンパーマペア ツルベ）」と必ず付け加えた。熱心な仏教徒のビルマの人々に「仏様同じ」という言葉は喜ばれた。

頭から白い布を被った若い娘たちが大勢集まった。モン・トンラという名のビルマ人の通訳によると、娘たちは石渡の演説がとてよよかったと褒め称え、石渡のことを「セボ」と呼んだ。セボとは、ビルマ語で「隊長」のことである。石渡は、演説が功を奏し、住民の態度が一変したような印象を持った。

3-2 シッターン平地作戦の諜報活動⁽³⁸⁾

1945年6月16日、第28軍（策）から敢威兵団に一通の電報が届いた。すでに述べてきた通り、ペグー会戦に敗れて、退路を塞がれペグー山系内に立て籠もっていた敢威兵団の松井秀治少将に、第28軍の桜井省三中将から、策の指揮下に入って、共にマンダレー街道を突破し、シッターン河を渡ってモールメンへ転進せよとの電文が届いた。全軍一斉にマンダレー街道を突破する時期は、7月20日夜半に決まった。敢威兵団の菊地参謀は、当時

の転進計画を手記に次のように記している。

「それは第一期、第二期に区分して、第一期はここで確定的なプランを立てるが、第二期のマンダレー街道突破と、シッターン河渡河はニューアレンビン西北方の、ペグー山脈東麓のバインダナアークで、当時の状況に即して指導要領を決めることにした。第一期の指導要領の概要は、神保部隊を先遣隊として7月4日現地出発、モシトワを経てペグー山麓の牛歩道を北進し、バインダナアークに至り、兵団主力の進出を援護するとともに、マンダレー街道方向の敵状地形を搜索し、シッターン河渡河のための情報資料を収集させることにした。」⁽³⁹⁾

この第一期に、石渡憲兵軍曹は、神保部隊の配属憲兵としてモシトワ部落への斬り込み隊に参加していた。石渡によると、この戦闘でモシトワ部落の英印軍が撤退したので、北方路の門戸が開けて、バインダナアークに敢威兵団全軍が集結することができるようになった。その先遣隊として沖元憲兵隊全員と神保部隊1個小隊がバインダナアークに先陣し、将兵3,400名が結集したのが7月14日であった。石渡の記憶では、バインダナアークはペグー山系の山裾にある大きな部落で、日本軍が結集しても部落住民は逃げずにいた。兵団

(37) モン・トンラは当時19歳で終戦まで憲兵隊の通訳をしていたが、終戦と同時に英印軍に捕まり、日本軍に協力した罪で処刑された。この事実を、石渡（現磯部）は、戦後日本のミャンマー大使館の独立記念祝賀会の席で聞いた。

(38) 石渡の聞き取り（2010年5月12日）。

(39) 菊地前掲書、287-288頁。

到着の数日前にバインダナアークに到着していた沖元憲兵隊（40名）に、兵団からシッタン河付近の敵状収集の下命があった。憲兵2名1組となり3班が決死隊となってバインダナアークを起点に3方向に分かれて情報を取りに行くことになった。憲兵隊40名は20名ずつに分かれて待機していた。石渡は沖元憲兵隊長ではなく准尉を長とするグループにいたが、危険な決死隊に進んで手を挙げる者はいなかった。この中から6名の決死隊を選出する際、ある曹長は「俺は腹が痛くて駄目だ」と言った。石渡も「モシトワ部落で、鶏や豚を撃って食糧にしようとしたら、拳銃が湿気で1発、2発撃っても銃身で止まって使えない」と言うと、横にいた伍長が「石渡軍曹殿、私の拳銃だったら大丈夫ですよ」と余計なことを言うので、石渡は結局伍長の拳銃を借りて、3班の決死隊の1班に選ばれてしまった。

他の2班の決死隊の行き先は不明であるが、石渡班はバインダナアークを起点に一番南方のダイウ（ダイク）という町を調査することになった。調査の目的は、敢威兵団が英印軍の攻撃を受けずにシッタン河を渡河できる退去路の敵状収集である。具体的な調査項目は、①シッタン河渡河の船舶、筏などの器材の有無、②ダイウの英印軍在住兵力、③マンダレー鉄道の機動力、④マンダレー街道からシッタン河までの間に、退去を妨げる河川及び橋梁きょうりょうの有無、⑤食糧調達可能な部落の有無（3千余の将兵の食糧が調達できるか否か）などである。つまり、敢威兵団のシッタン河までの退去路を阻害するものがあるか否かを調査することであった。そして、持ち帰った情報を根拠に

兵団司令部で退去路の策定が行われるため、決死隊の諜報任務は非常に重責であった。それゆえ、有益な情報を提供した憲兵には、金鷄勲章の授与と二階級特進が申し渡された。一方で、何らかの事情で7月20日までにバインダナアークに帰還できなければ単身モールメンに脱出してよいとの命令を受けていた。

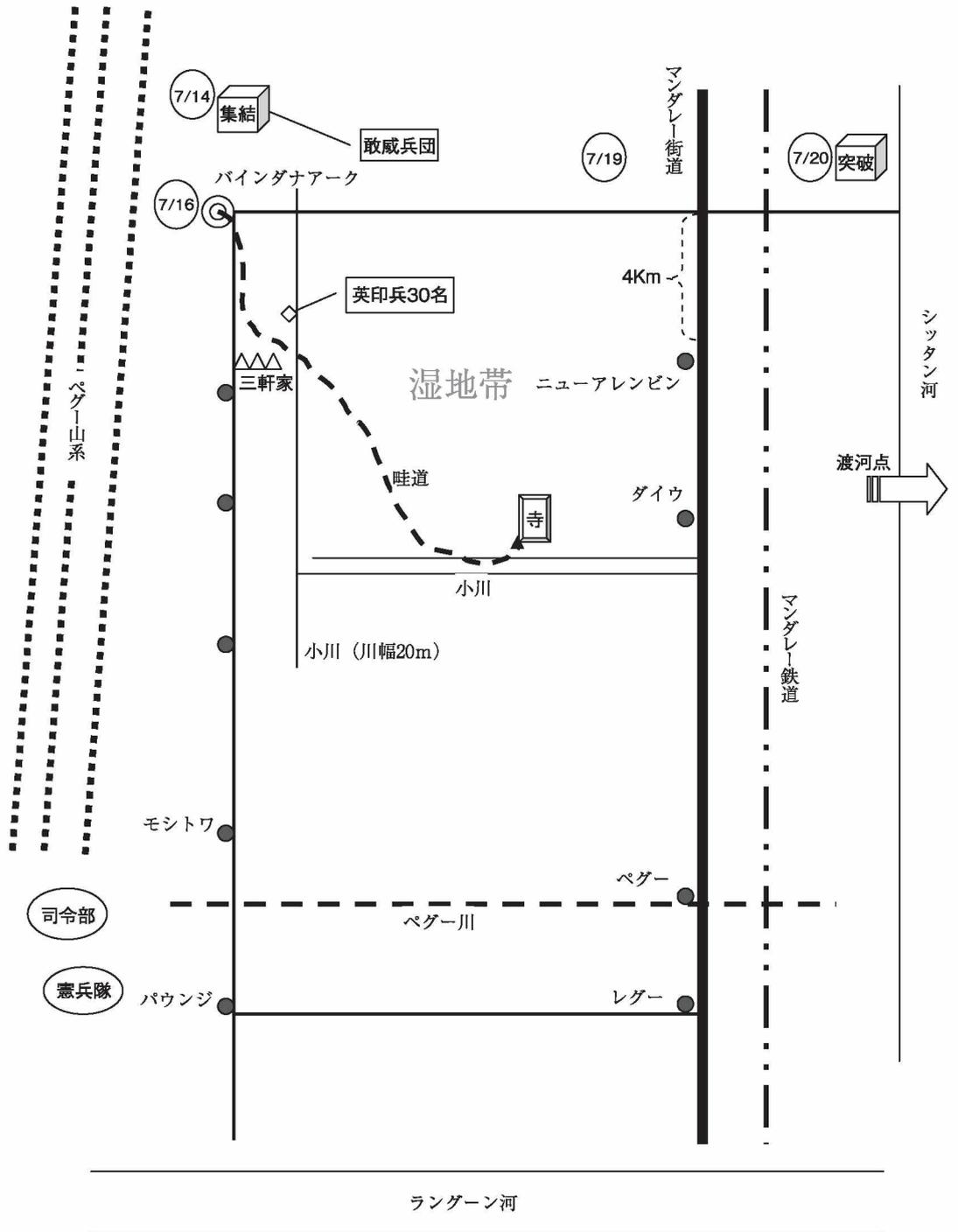
石渡は、今度こそ生還できないと思いながら眠れぬ夜を過ごした。いよいよ出発の時、石渡は分隊の准尉に「石渡軍曹、必ず帰って来るんだぞ」と言われ、それは「死んではいけない」との意味だと思い、胸が熱くなったことを覚えている。

【石渡班（石渡軍曹と伍長と道案内の現地人の計3名）の具体的な行動】（図2参照）

1945年7月16日、ダイウに親戚がいるという現地人の男を道案内にして、石渡軍曹と伍長は出発した。2人ともロンジーにルエ（布製のカバン）を肩から提げて裸足という現地人の風体である。ロンジーにはポケットがないので、ビルマ人はルエに貴重品や煙草など身の回りの物を入れている。石渡は、ルエの中に拳銃一丁を入れ、巻きスカートのようなロンジーを腰でたくし上げた中に手榴弾2個を隠し持った。1個は敵に追撃を受けた時に投げる緊急避難用、もう1個は自決用であった。

バインダナアークの部落を出てから小1時間ほど歩くと、川幅約20メートル、水面からの堤防の高さが3、4メートルほどの小川が眼前に見えた。川では30名ぐらいの英印兵が水浴をしていた。堤防に歩哨が1人立ち、兵器は歩哨の傍に乱雑に置かれていた。ここ

図2 石渡班の行動図



筆者作図

を突破しなくてはならない。3人は英印兵らの顔を見ないように突き進んだ。歩哨は3人をちらっと見たが、別段怪しんでいる様子もなかった。そこを通過してしばらく川沿いに歩くと三軒家があり、そこで船を出してもらい向こう岸に渡った。道案内が近道だと言うので水田の畦道を歩いていると、向こうからビルマ人の男が2人歩いて来た。逞しい身体の若い男だった。道幅の狭い畦道だから身体を擦り合わせないとすれ違ふことができない。伍長と相談して、相手を見ない、口をきかないと決めた。伍長が先頭で、真ん中が道案内、石渡が後尾の1列隊となって2人の男とすれ違った。男たちが不思議に思って振り返って何やら話している気配を背中に感じながら、石渡は「奴らは何でこんなバインダナアークのような山の中に入っていくのだろうか？ 日本軍がいるから英軍に頼まれて状況を調べに来たのか？ あるいは奴らは英軍のスパイなのか？」と不審に思った。

2人と別れて30分後、物凄い豪雨になった。ビルマ人が着ている薄手の上着では雨が地肌に突き刺し痛くて我慢できない。ビルマの雨期は、豪雨が下から巻き上げて来るような勢いで降りまくり、想像を絶する激しさである。⁽⁴⁰⁾ 辺りは暗くなり、寒さと身体に当たる痛みに耐えかねて、田んぼの脇に背丈ほど伸びた萱場に飛び込み小1時間じっと屈んでいた。先ほどの男たちが不審に思って石渡らを追跡して来るかどうかを確認する目的もあった。

男たちの追跡もなく雨も小降りになったの

で、3人は出発した。畦道を歩いていると牛車道にぶつかり、それを左折して東に進めばダイウの町である。牛車道に沿って小川が流れている。町が近いと牛車道上を行き交う人に見られるので、3人は川の中を歩くことにした。小川の両脇には樹木が繁茂していた。胸までの水位を流れに逆らいジャブジャブ歩いた。暫く歩くと案内人の男がこの辺で上がろうと言うので、牛車道に上がってみるとそこに僧院（ボンザー・チャウン）があった。夜も更けてきたので、今晚は僧院に泊めてもらおうと中に入ってみると、10名ぐらいの僧侶（ボンザー）が経をあげていた。読経が終わると、3名の僧侶がこちらに来て、道案内人と何やら話し込んでいる。傍で石渡軍曹は伍長に「日本兵と分っているのに、分らない振りをして英軍に通報されても困るから、我々は日本兵だと話してみよう。それで坊さんの顔色が変わったら2人で飛び出そう」と持ちかけた。早速、伍長が日本兵であると僧侶に告げると、3人は大笑いをして「最初から分っている」と答えた。

ひとまず僧侶らは好意的であった。そこで石渡は僧侶らに「ビルマの国はビルマ人のものだ、ビルマからインガリーを追い出しビルマを独立させるために我々は戦っている」と相変わらずの宣撫文言を力強く語った。「日本とビルマは仏様同じ」と付け加えることも忘れなかった。僧侶には学があるが政治的なことを語ることはできない。しかし一言、「今までビルマ国民には力がなかった。今こそ日本

(40) ビルマの雨期は5月から10月で、7,000ミリの降雨がある。

国の力でインガリーを追い出し、ビルマ人のビルマ独立国家とすべきだ⁽⁴¹⁾』とだけ語った。石渡はこの僧侶らからダイウの情報を取ることにした。僧侶は托鉢で方々を歩いているので、ダイウの町の様子に詳しくはなかった。ダイウには大した兵力はない。大砲や戦車もない。ダイウに続く道は湿地帯だが大きな川には阻まれることはない。ダイウはマンダレー街道沿いにある町だが、その先のシタン河には船はない。この辺りは漁場ではないので漁師はいない。シタン河周辺には大きな部落はなく、3、4軒小さな家が点在している。つまり、ダイウ経由でマンダレー街道を突破しシタン河に辿り着いても、シタン河を渡河させてくれる人も船もないということだ。

さらに僧侶から極めて重要な情報を入手した。ダイウには日本軍が作った飛行場があったが、飛行場に連合軍の空挺部隊が落下できないように大きな穴をいくつも掘って退却したのだ。この穴が、雨期で冠水していてどこが穴だか分からなくなり、この時期にダイウを大軍が通過するのは極めて危険だというのである。

菊地参謀の手記にも、沖元憲兵隊の調査により、ニューアレンピンより以南の水田は通過不可能であり、ニューアレンピンの北側に

1ヵ所通過可能な地帯があったと記されている⁽⁴²⁾。ニューアレンピンとは、ダイウより北方にあるマンダレー街道沿いの町である。このことから敢威兵団司令部での退去路策定時に、ニューアレンピン以南一帯（ダイウを含む）は雨期であちこちが水没しているため、通過できないと判断されていたことが推測できる。石渡班以外の決死隊の2班は情報収集に失敗してただけに、石渡班の情報が兵団の退路を決定付けた根拠⁽⁴³⁾となったと言えよう。

さて、僧院に一晚泊まった石渡は、翌朝（17日）、道案内人の男をダイウに調査に向わせた。この僧院からダイウまでは2キロぐらいの距離である。日中は住民が僧院に供え物を持ってやって来るので、石渡と伍長は庭にあるコンクリート建ての^{もみ}籾倉庫の2階^{かくま}に匿われた。僧侶は「住民に見つけれないように絶対に窓を開けてはいけない」と厳命した。1945年3月27日のアウン・サン⁽⁴³⁾の反日蜂起を機に、日本軍の敗色が濃くなるに従い、ビルマの住民の多くが日本軍に対して敵対的な態度に一変した。日本軍を見たら殺せという命令が出るほどに関係は悪化し、日本兵士が殺害される事件もしばしば起きた。僧院に日本兵がいるのが英印軍に分ると僧侶らも具合が悪い。夕方になり夜が更けても道案内人の男は戻らな

(41) 東京憲友会『東憲』会報 365号（平成11年11月10日）、7頁。

(42) 菊地前掲書、284頁。

(43) 石渡の証言（2010年6月4日の聞き取り）によると、他の2班共に住民に発見、追撃され逃げ帰って来たので情報が取れなかった。ただし、一番北を調査した1班の朱通軍曹は、追撃後行方不明となったので、憲兵分隊では戦死と見なしたが、彼は捕虜となって生きていた。英語ができた朱通軍曹は、戦後ラングーン中央刑務所で英印軍の通訳として使われていた。石渡が戦犯容疑でラングーン中央刑務所に収監されている時（1946年3月-1947年4月）、朱通軍曹に再会し、1947年8月に共に復員した。

かった。男が英印軍に通報したのではないかと僧侶らはひどく案じた。寺から即刻出て行くように夜中じゅう何度も懇願されたが、ビルマの夜は暗黒の闇夜で、おまけに前が見えないほどの豪雨に阻まれ、直ぐに寺を出ることができなかった。ようやく白々と夜が明けた頃、2人は寺を出た。僧侶らが道に出て来て見送ってくれた。バインダナアークの方向を教えてもらって、「ミヤジイ・チズデンマレ（大変ありがとうございました）」とビルマ語で手を合わせて礼を言って別れた。

伍長と2人でバインダナアークの方向を目指して水田の中を一直線に駆け出した。視界を遮るものはなく狙撃されたら逃げ場がない。伍長の足が速く石渡と50メートルぐらい差がついた。石渡は、「2人一緒にいてやられるより、どちらか1人でも生き残ればよい」と思った。昨日船を渡してくれた三軒家の所まで辿り着き、2人は無事バインダナアークに帰還した。到着後すぐに情報は、沖元憲兵隊長から敢威兵団司令部へ報告された。

翌朝（18日）、石渡班に司令部から兵団長松井少将が直接話を聞きたいから出頭せよとの命令が来た。伍長が嫌がるので仕方なく石渡軍曹が1人で松井少将の所に出頭した。松井少将は部落の中の割合大きな家の2階に1人で座っていた。石渡は「参りました」と言っ

(44) 前掲書『シッタン・明号作戦』, 471頁。

であった。この階級章に3,400名の将兵の命を預かる使命感と責務と苦悩が込められていた。憲兵の情報を基に、全軍を無事にモールメンに脱出させるための最終的な決断を下すのは、部隊長でも参謀でもない松井秀治少将に他ならないからである。

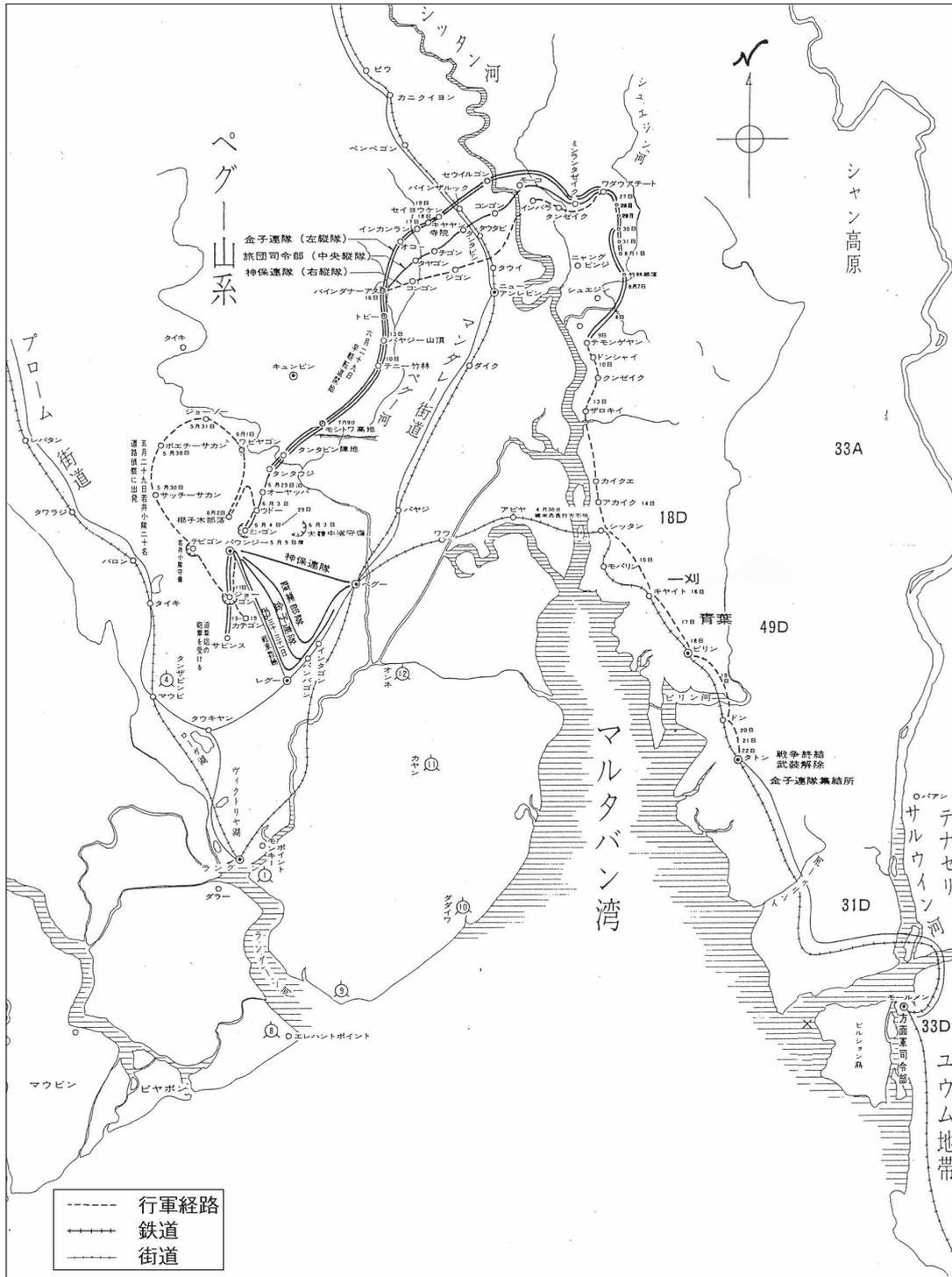
4. 敢威兵団のシッタン平地作戦の実像（図3参照）

敢威兵団のシッタン平地作戦の実際の行動について、公刊戦史には次のように記述されている。

「敢威兵団は7月19日夕刻、三縦隊になって各集結地を発進した。右縦隊（神保部隊）は7月20日未明ジゴン付近で敵の攻撃を受け、その後、砲撃および一部地上部隊の妨害もあって、20日夜のマンガレー街道突破は、神保部隊の本部が成功したのみであった。（中略）中央縦隊は敵に発見されることなく予定計画通り、20日夜半にマンガレー街道を突破し、22日夜から24日夜にかけて、民船と筏を併用してモーコ付近でシッタンを渡った。この間数次にわたって敵機の攻撃を受けた⁽⁴⁴⁾が大きな損害はなかった。」

石渡憲兵軍曹は中央縦隊にいた。中央縦隊には、兵団司令部、憲兵分隊、防疫給水部、野戦病院などが含まれていた。バインダナアークを起点に右縦隊の神保部隊、左縦隊の金子

図3 敢威兵団金子連隊・若井小隊行動要図



出典) 小宮徳次『還らざる戦友——蘭 貢 高射砲隊司令部顛末記』求龍堂印刷, 1975 年を一部修正。

部隊、中央縦隊に兵団司令部という編成で、司令部は左右で護衛されるような形で進み、公刊戦史にあるように20日の夜にはマンガレー街道を突破し、24日までにおおむねシッタン河を大きな損害なく渡河した。

石渡の聞き取りを基に中央縦隊の行軍の様子を通過場面ごとにまとめてみよう⁽⁴⁵⁾。

(1) 最初は、マンガレー街道突破までの場面である。

7月19日、石渡はマンガレー街道の手前で待機しながら20日の夜を待っていた。日も暮れかかった頃、師団司令部が出発した。石渡が待機していた場所から少し離れた場所に椰子の木で囲まれた大きな部落があったが、そこに向かって英印軍がどこからか大砲をさかんに撃っていた。先遣隊に続いて憲兵分隊も出発したが、石渡は途中で転び、ぬかるみに銃を落とした。銃を捜索しているうちに彼は憲兵分隊から大きく後れを取ってしまった。しかし、前方で銃声も聞こえず交戦している様子もなかったため、石渡は「うまく情報が取れた」と作戦の成功を確信した。予想通りマンガレー街道上の英印軍の攻撃はなかった。街道は2メートルの斜面を上がった所にあり、石渡は街道の道幅を歩測（11歩）した。マンガレー街道を通過した後も膝までぬかるんだ湿地帯をシッタン河に向かって歩いていると、馬上の将校が「夜が明けるまでに一歩でも早く東へ進め！」と怒鳴っているのを石渡は目撃

した。この将校こそが菊地参謀であった。石渡は戦後菊地の手記を読んであの時の将校が菊地参謀だったと確信した⁽⁴⁶⁾。石渡が馬に乗っている将校を見たのは、後にも先にも1回きりであった。

3,000名以上の敗残兵の行軍が数多^{あまな}の落伍者を出したであろうことは十分想像に値する。石渡の証言からも落伍者の悲惨な様子が推測できる⁽⁴⁷⁾。石渡の前方を分隊の憲兵3人が歩いていた。真ん中の軍曹を2人の伍長が支えていた。看護されていた軍曹が、石渡の声を聞いて「石渡軍曹、私、目が見えないですよ」と言った。彼は現地人が作った竹の帽子を深く目まで被っていた。石渡は「当たり前だ、もっと帽子をあげろ」と怒鳴った。石渡は彼らを追い越し先を急いだ。退去戦では部隊ごとに歩くことを求められなかった。体力が残っている者が先に行くだけである。憲兵隊もいつしかバラバラになり、兵隊はみな肩で息を切りながら一歩でも足を前に出すことだけを考えた。夜明けに、爆撃もせずに連合軍機が空を旋回していた。昼頃、石渡は川淵の木の下で軍機が去るまで退避した。小休止をとり、少しばかり飯を食べた。

夕方に再び歩き出し、その路上にあった部落の一軒家に憲兵が集結した。そこで石渡は、見覚えのある伍長に「あの軍曹はどうした？」と尋ねると、「置いてきました。連れて行って、連れて行ってと泣きながら言うけれど、どうしようもないから、すぐ迎えに来るから、す

(45) 石渡の聞き取り（2010年5月12日）。

(46) 菊地前掲書、290-291頁。馬に乗って「『早く、急げ……』と叫びつづけた」とある。

(47) 石渡の聞き取り（2010年5月12日）。

ぐ来るから」と^{なだ}着めて、湿地帯に遺棄してきたと言う。「石渡軍曹、目が見えないのは帽子のせいじゃないんですよ、本当に奴は目が見えなかったですよ」と伍長が言った。マラリア、栄養失調、アメーバー赤痢などを併発すると、目が見えなくなることがしばしば起きるのだ。目の見えない軍曹は引きずられるように歩いていたが、歩けなくなったところが彼の死に場所になった。原野の中の孤独も耐え難い。「元気でも一人ぼっちで真っ暗闇に放り出されたらね、もう駄目です、集団でなければね、遅くても固まりの中に付いていかなければ駄目です」と石渡は語った。

(2) 次に、シッタン河の堤防付近の場面に目を転じよう。

石渡は、マンガレー街道を20日の夜中に通過してから、約15、6時間歩いて憲兵隊が集結している一軒家に辿り着いた。一軒家のすぐ裏に水路があり、その水路には貧弱な橋が架かっていた。石渡が橋を渡った途端、マンガレー街道方面から砲撃があった。英印軍の追撃である。弾が近くに落下した。湿地帯の中、少しでも低い場所に腹ばいに伏せた。15分から30分で砲撃が止んだので、川沿いに再び歩いた。このまま歩けば夢にまで見たシッタン河である。

シッタン河手前の部落に朝方着くと、そこに司令部と憲兵隊が集結していた。その後も幾度か空爆を受けたが、夕方を待っていよいよシッタン河に向かって行動を開始した。その

部落から河までは葦が群生していた。人が歩いて倒した葦の跡を踏みしめながら一列隊で歩いた。その列に病人がいるとスムーズに歩けず列が途切れてしまう。石渡は、行き先が分らなくなると困るので、病人は歩けなかったら列外に出るように怒鳴った。ここでも落伍者が後を絶たなかった。

シッタン河に着いても、闇の中で眼前に何も見えない。水面も見えない。ただゴーゴーと河は不気味に唸っていた。夜半の雨に打たれ、身体はずぶ濡れて寒さに震えた。砲撃の心配をよそに焚き火の傍から身体を離すことができなかった。将校が「渡河だ、筏を作れ」と大声で叫んだ。周辺にあった三軒の竹の家屋が筏を作る竹の調達のため、あつと言う間に姿を消した。石渡も10人ぐらいで筏を夢中で作った。筏を作るのに竹を括る紐がない。背囊の紐を代用し工夫した。筏を作る場所も重要である。河に直ぐに引き込めるような地の利を利用して作らないといけな。筏には兵器、衣類、米など最小限度しか載せられない。米は靴下に入れて携帯する、これが軍隊方式である。つまり、筏に人は乗らないで、彼らは荷物を載せた筏を泳ぎながら対岸まで押すのである。水深は深く足が河底につくことはない。

石渡は禪一つになって、さあ行こうとした時、「待ってくれ、下流の方で工兵隊が鉄船で渡してくれるぞ」という声⁽⁴⁸⁾を聞いた。間一髪だ。筏を河に引きずり込んでしまったらもう後戻りはできないからだ。流木が矢のよう

(48) この鉄船を準備したのは安兵団(第53師団)の工兵であったことを石渡は戦後知る。

な速さで流れていた。河は波立ちながらゴーゴーと唸り声を挙げ、古い竹、新しい竹、腐った竹が30本、50本と株になってひっきりなしに流れていた。河川の中央帯を突破できずに筏を押しもがいている兵隊に向かって石渡は大声で叫んだ。「下流で工兵隊が鉄船で渡河させてくれるから上がれ！」もがきながら「鉄船で渡してくれんだとよ」と喜び合っている兵隊の音が耳をかすめたが、彼らが筏を岸に戻し、鉄船に乗れたかどうかその後のことは分らない。

菊地参謀もまた筏を使わず別の方法で渡河を試みた。その方法が手記に記されている。

「わたしは何とかしてカヌーを探し、それを二艘つらねて門橋をつくり、対岸へ綱を渡して滑車をつけ、滑綱渡しをさせようとして、まずカヌーの搜索と、工兵小隊に滑綱渡しの準備を命じた。さいわいそれが実現し、イカダをやめて門橋で渡ることになったのだが、策集団主力も河上で目下渡河中の様子らしく、イカダとともに流れてくる兵隊の群れが、助けをもとめて叫びながら、そして溺死体になって黙々と、濁流に浮きつ沈みつしていたが、わたしは極力救助するように工兵に命じた。⁽⁴⁹⁾」

粗末な筏で増水したシッタン河の激流を渡り切るのは至難の業であった。シッタン河の淵まで辿り着いた多くの将兵の喜びも束の間であった。彼らの命の灯火は一瞬にしてシッタン河の激流と共に消え失せた。

シッタン河渡河の悲劇は、将兵だけのものではなかった。シッタン河の渡河点にはわれ先にと集まっていた兵隊に混じりながら、朝鮮人や中国人の慰安婦らがたたずんでいる姿があった。ユカター一枚で渡河点に立ち竦んでいる朝鮮人慰安婦の姿は哀れなものであった。ある者は穢ないモンペ姿で、髪も顔も泥まみれで、見る影もない女になっていた。彼女らは戦地で身体を張って得た大量の紙幣(軍票)を頭に乗せていた。慰安婦らは皮肉にも身体に括りつけられた「紙くず」の重みに水中で身体を支えきれず、多くはシッタンの濁流に吞まれて生きて帰れなかった。⁽⁵⁰⁾また、シッタン河の悲劇に大隊本部付きの台湾人庸員が巻き込まれた記録が残っている。蘭貢高射砲隊(森12200部隊)の損田大隊の将校であった小宮徳次の手記に、「不幸にも流失し行方不明になった以下十四名」の氏名が明記されている。そのうち10名が台湾人の雇員であった。⁽⁵¹⁾

英印軍はシッタン河の渡河点に日本軍が集結するのを待っていたとばかりに、昼間に激しい空爆を行った。菊地参謀の手記では、「沖

(49) 菊地前掲書、292頁。

(50) 金一勉編著『戦争と人間の記録 軍隊慰安婦』徳間書店、1992年、126-127頁。1945年頃のラングーンには約100名の慰安婦がいたと言われている。将校用の慰安所「粹香園」(九州の女性が約30名)と、兵隊用の慰安所が3カ所で、朝鮮女性約70余名がいた。ビルマ方面軍はラングーン撤退時、なじみの女性だけを連れて行き、朝鮮人慰安婦らには撤退を秘密にし置き去りにした。

(51) 小宮徳次『還らざる戦友』求龍堂印刷、1975年、479頁。

元憲兵隊は堤防上で爆撃をこうむって、その全弾が若い隊員のグループに命中し、全滅させられた⁽⁵²⁾と書かれているが、実際は、全滅は免れ、堤防での犠牲者は憲兵8名であった。石渡が咄嗟に出た蛸壺に、入れ替わりに飛び込んだ伍長が爆死した。石渡の身代わりとなった伍長の遺髪を取ろうと軍刀を抜いた。錆びていて、なかなか遺髪が切れず難儀し、切った遺髪は准尉に渡した。残りの7名は一軒家の物置場の床下に滑り込んで全員爆死した。

憲兵隊は司令部の次に渡河できることになった。准尉が「誰のでもいいから兵器を身につけろ」と叫んだので、憲兵らは我に返って兵器を慌てて集め、渡河の準備をした。戦死者の確認をする間もなかった。工兵隊が1艘の船に7、8名ずつ乗せてくれた。船の漕ぎ手は4名だった。いよいよ憲兵隊の順番が来てシッタン河を渡れた時の喜びと安堵感を石渡は生涯忘れられないと語った。

(3) 次の場面は、シッタン河渡河後からシュエジン河までである。

シッタン河を渡河した安堵感も束の間で、次なる試練はシュエジン河の渡河であった。シッタン河渡河後の悲惨な行軍の様子を石渡の聞き取りから引用しよう。

「7月末頃、各部隊がバラバラで進行しているんですがね、休憩した時、靴を脱いで自分の足を見てみると、足がふやけていて、ズボンをあげると血が噴出して

きて、もう皮膚がなくて脂肪が出てきて、毛穴から血が噴出している。今度は足がこんな腫れちゃっているから靴が履けない。一緒に歩いている兵隊も靴が履けないからぼろきれで足を巻いて、靴は首から吊るし、背負った背囊の上に鉄砲を乗せて歩いた。みんな倒れて死んでいったんじゃないかな。足だけの問題じゃないです。マラリア、栄養失調、アメーバ赤痢の下痢、昼夜歩いているから、便所だっけ行っていたら置いてきぼり。だからお尻からぐずぐずの糞が出て、垂れ流しですよ。そこに銀蝇がついてね、乞食よりもっと惨めな姿。加えて雨期最盛期、連日の豪雨で力尽きた、このような兵士が川の淵に沿って列を作って死んでいました。(何という河ですか?) シュエジン河の支流じゃないかと思いますね。私もこの兵士たちも同じ苦しみでしたが、どんなに苦しくとも頑張らなければ国に帰ることができない、生きたい、生きるんだと思って心に鞭打った。夕方になると、今日も一日生き延びたと思いました。心身一体と言うけど、よくこの身体で命を支え持って来れたと、この時は身体と命は別の思いでした。」(()は筆者の⁽⁵³⁾質問)

方面軍から兵団は、シッタン河渡河後は、シュエジン部落に集結せよとの命令を受けていた。この命令は公刊戦史には書かれていない。シュエジン部落は地図にあるが道程が見

(52) 菊地前掲書、292頁。

(53) 石渡の聞き取り(2010年5月26日)。

当たらない。密林の中で部隊は進むべき方向が分らずに立ち往生した。この停滞期(約8日間)に、マラリア、アメーバー赤痢、栄養失調で多くの将兵が密林の中で死んだ。病死や衰弱死以外に自決した者も多かった。石渡らはシュエジン部落までの道程を探るため、将校斥候に出た。石渡憲兵軍曹と憲兵伍長の2名と准尉1名と当番兵2名の5名は、昼間は誰もいなかった部落に夜に再び行ってみると灯りが見えた。家人がいる。母親らしき女と3歳ぐらゐの女の子がいた。石渡はとっさに女の子を捕らえた。大泣きする子供を抱えながら「私は日本兵だ。道を知りたい。男はいるか?」と叫ぶと、女は男のいる場所に石渡らを案内した。石渡は、男にシュエジン部落の道程を聞いた。男の指す方向は兵団が進んで来た方向と同じだ。シュエジン部落までここから約2マイルだという。安心した石渡は子供を女に返した。ふと眼下に雲海が広がっていた。ここは高い山の上にある部落だった。部隊は山を下りた。そこにはシュエジン河があり、その川向こうにシュエジン部落があった。シュエジン河を渡河しなくてはならなかった。

工兵が河床道で渡河用の筏を作っていると、向こう側の小高い竹林の山から突如狙撃を受けた。工兵など4、5名の犠牲者を出した。部隊をこれ以上停滞させないために、二手に分かれて将校斥候に出た。シュエジン河の渡河点を探すためである。石渡ら憲兵2名、将校2名、当番兵の計5名は川上方面に、別の5、

6名は川下方面に将校斥候に出た。川下方面に出た将校斥候が、運よく第33軍(昆)の救援部隊の連絡将校に遭遇し、渡河点を聞いて戻って来た。この連絡将校は、第28軍(策)の兵団長宛ての書簡を持っていた。菊地参謀⁽⁵⁴⁾の手記に書簡の内容が記されている。

「昆集団はシュエジン河以南のシッタン河西側要地を保ち、敵に反撃を加えつつ貴集団の転進を援護し、収容に任じあり。シッタン河東北10キロ内外に裏街道があつて、一日行程ごとに糧秣医療宿泊の準備あり。シュエジン河の渡河は工兵の渡河作業隊で、一夜千人の渡河能力あり。渡河点はシュエジン河東北6キロのゴム林なり。ときどき敵がこの渡河点を砲撃す。注意されたし。」

菊地参謀は密林の山や谷を越え、シュエジン河の渡河点のゴム林に8月2日頃ようやく集結したと記している。タンタウジーを出発した時の3,400名の兵員が、3分の1を減じて、ゴム林での人員点呼で総員約2,200名⁽⁵⁵⁾になっていた。

5. むすびにかえて

シッタン河の渡河及び渡河後の退去路で多くの将兵の命が奪われ、兵士たちの屍の累積は後を絶たなかった。敢威兵団は、シッタン河渡河のため携行兵器の大部、特に歩兵重火器の全部を失い、タンタウジー(ペグー北、ペグー山中)出撃当時の兵力約3,400名は約2,200名に

(54) 菊地前掲書、293頁。

(55) 同上。

減少した。⁽⁵⁶⁾雨と飢えと傷病との戦いは、シッタン河を渡河した後の将兵も逃れることは難しかった。北ビルマでは、インパールからフーコン溪谷への退却路を「白骨街道」と呼ぶように、南ビルマのシッタン河渡河後の退去路もまた、無惨な将兵らの屍が延々とシッタン河東岸に沿って連なっていた。

公刊戦史には、8月上旬随時シッタン河を渡河した第28軍の惨状は次のように記されている。

「第28軍の諸隊は、シッタン東岸に進出してから、爾後シュエジンに到るまでの行軍間に多くの落伍者、斃死者、自決者を出した。その状況はまことに酸鼻をきわめていた。第28軍参謀土屋英一中佐は、その行軍路を『屍臭の道』と書いている。第28軍にとってビルマ作戦最後の場面がこの『屍臭の道』であり、この行軍が終わった直後、あるいは行軍中に終戦を迎えたのである。⁽⁵⁷⁾」

さらに、第28軍参謀の土屋中佐の手記から引用しよう。

「最後の難関たるシッタン河を突破し得たという^{あんど}安堵感から、将兵の張り詰めた気持はにわかに弛緩し、宿営地に残ったものは、特に収容に出かけない限り、大部分はそのまま息を引き取ってしまう。

軍司令部の通過した後を、それから数日経って振武兵団の左突破縦隊が前進したが、部落内の家々には戦病死者の屍臭が漂^{たがよ}い、とても宿泊はできなかったという。軍司令部の進路にも落伍者の死体が数多く残されていた。私達は最初のうちは、路傍の死体を埋葬しながら南下したが、やがてその数が増えるにつれ、それもできなくなった。⁽⁵⁸⁾」

ビルマ戦線の戦死者は、いわゆる戦闘による戦死者よりも飢えと傷病による衰弱死や病死者の方がはるかに多かった。シッタン河突破作戦で、第28軍は33,000名のうち1万人近い⁽⁵⁹⁾病死者を出した。敢威兵団はすでに述べたように3,400名のうち、1,200名の戦没者を出したが、石渡の聞き取りからも溺死や餓死や傷病死が主な死因であったことが推測できる。シッタン河突破作戦の本当の敵は、実は英印軍ではなく、餓死や傷病死を大量に招いた軍上層部の無謀な作戦計画と補給無視の戦術にあったと言えよう。

本稿では、シッタン河突破作戦の中の「シッタン平地作戦」において、一人の憲兵軍曹の情報がどのように敢威兵団3,400名の将兵の命運を左右したかを明らかにした。すでに述べたように、公刊戦史では退却戦の悲惨さを訴える記述に多くの紙面を取り、ビルマ戦最後の退却戦の作戦策定を検討しているとは言

(56) 前掲書『シッタン・明号作戦』、481頁。

(57) 同上。

(58) 同書、481-482頁。

(59) 同書、483頁。

い難い。飛ぶ鳥跡を濁さずとはいかなかったビルマ方面軍のお粗末な撤退劇からも推察できるように、ビルマ方面軍は満身創痍の将兵を無事にモールメンまで撤退させるための適切な作戦計画を持ち合わせてい⁽⁶⁰⁾なかつた。つまり、ビルマ戦線最後の撤退作戦は、前線の指揮官の臨機応変なその場の判断に任されていたのである。松井秀治少将が奇しくも石渡憲兵軍曹との面会で見せた指揮官としての苦悩が示すように、敢威兵団 3,400 名の命運は松井少将の判断如何にかかっていた。

先に述べたように、公刊戦史では、シッタン河突破作戦は日付と通過地点に関するわず⁽⁶¹⁾か数行の記述に留まっている。

吉田裕が指摘しているように、公刊戦史には三つの問題点がある⁽⁶²⁾。

第一に、執筆者の大部分が旧軍の幕僚将校であり、戦争に対して弁明史観的である。第二に、分析の対象は作戦・用兵が中心で、とりわけ兵站・情報・衛生などが軽視されている。第三に、陸海軍の対立がそのまま戦後に持ち越され、互いに批判的な立場をとっている。

吉田によれば、戦後生まれの軍事史研究者は公刊戦史（戦史叢書）に対して批判的であり、彼らは新たな公刊戦史のプロジェクトを⁽⁶³⁾検討中であるという。その際に、本稿で参考にした石渡憲兵軍曹のような「兵士たちの証

言」が利用されてしかるべきであろう。さもなければ、戦場で凄惨な戦闘を行った兵士たちのリアルな姿が見えてこないからだ。戦後すでに 65 年を経て、戦争の体験を証言できる人々が高齢化し、最後の聞き取りとなりつつある現時点において、聞き取りは重要な歴史研究の方法となるであろう。中でも文字や活字に現われない加害の実像や、本稿のような秘匿性の高い諜報任務においては、聞き取りが最も重要な研究方法となる。石渡の証言は、それ自体が希少で価値ある口述史料であることは言うまでもないが、他の文献史料と突き合わせる過程で、石渡の証言の「正当性」が裏付けられる。

このように、退路選定の根拠となった石渡憲兵軍曹の諜報活動における証言は、少なくとも敢威兵団の退却戦（シッタン平地作戦）の内実を明らかにする上で、極めて重要な証拠となっている。退却戦に限らず、作戦の策定においても憲兵隊が実施した諜報及び宣撫活動は、特務機関員に遜色ない働きを行っていたと言えよう。石渡の証言は、単に文献史料を補足・補完する脇役としてではなく、むしろ敢威兵団の退却戦において憲兵の主体的な諜報活動による新史実を明らかにした。それによって、防諜色の濃い憲兵像とは異なる、現地住民を巧みに懐柔する憲兵の具体的な姿を

(60) ビルマ方面軍の隷下軍第 28 軍の退却戦に対する無責任な対応について、第 33 軍の田中参謀は手記に「兵站補給的な施設を何一つすることなく、第 33 軍にまかせっきりであった」と記している（田中前掲書、263 頁）。

(61) 前掲書『シッタン・明号作戦』、471 頁。

(62) NHK「戦争証言」プロジェクト『証言記録 兵士たちの戦争④』NHK 出版、2010 年、9-10 頁。

(63) 同書、10 頁。

提示することができた。本稿が明らかにしたように、シッタン平地作戦の成功の背景に、沖元憲兵隊の石渡憲兵軍曹の敵状情報の成果が隠されていた。

一方で、特殊教育を受けた専門的な特務機関員ではない一憲兵が、こうした単独の諜報活動を担い、またそれがうまく機能したという事実は、ビルマ戦線の戦史においてどういう意味を持つのだろうか。山本武利がすでに指摘しているように、ビルマの日本軍の諜報機関は、スパイ工作や防諜などの諜報活動において、軍の作戦に貢献できるほどの目立った成果を挙げられなかったと言われている。これが事実だとすれば、石渡憲兵軍曹の諜報活動の成功の理由を検討する過程の中で、ビルマでの日本軍の諜報活動がなぜうまく機能しなかったのか、その原因や実態が明らかになるだろう。

イギリス第33軍団のベネット大佐は、「ビルマ——日本軍諜報組織と防諜方法」(1944年9月16日付け)という報告書の中で、日本軍の諜報活動の問題点を列挙している⁽⁶⁴⁾。その中で、日本軍の諜報機関は、前線での少数民族工作において、現地人の習慣や風俗などの事情を軽視しがちであること、さらに、英軍が占領した村に変装した日本人を潜入させず、いつも現地人をスパイとして使うから、住民の心を引き寄せられないことなどを指摘している。

ビルマは地形的にも気候的にも過酷な自然環境を呈し、さらにビルマ族、カレン族、シャン族、カチン族などの宗教や慣習や風俗の異なる多様な部族が暮らしている。それゆえ、諸民族の習慣や風俗を無視した威圧的な軍律を押し付けるような日本軍の防諜方法が、現地住民から強い反感を買い、必要な協力を得られないばかりか、ひいては日本側の現地工作員や傀儡勢力からも最後には裏切られる結果を招いた。とりわけ戦況が悪化したビルマ戦末期に追い詰められた日本軍が、強引な食糧徴発や暴力的な防諜、諜報活動を頻繁に行ったことは容易に想像できよう。ビルマでの諜報活動は、少数民族の特殊性を尊重した懐柔策が不可欠であったが、そこまで手が廻らなかったのが日本側の実情であった。

しかしながら、少なくとも、石渡憲兵軍曹の諜報活動の実態には、ベネット大佐の上記の指摘は当てはまらない。石渡はある時はロンジー姿の現地住民に変装し、一月以上もカチン族の村に単独で潜入しながら英印軍の情報を収集した。石渡が出会った光機関の小野中尉もまた単独で行動し、時には石渡と協力しながら宣撫及び諜報活動を実施した。石渡は、前線での諜報活動について特務機関員のような特殊教育を受けたわけではないと証言している⁽⁶⁵⁾。石渡は現地住民や僧侶から食糧などの援助を受け、住民の家や寺院に身を寄せ

(64) 山本前掲書、198-206頁。ベネットは、報告書の冒頭で、英軍の諜報部門、第4軍団、第33軍団の将校や民間将校の話、日本側押収資料と彼の個人観察に拠るレポートだと述べている。前半部分で、日本諜報機関(光・南・西・北機関や憲兵隊)の構造と機能を簡潔に説明し、後半部分で、日本諜報活動の問題点がインパールなどの敗戦を招いたとし、敗因としてとくに情報不足による事実認識の甘さを指摘している。

ながら情報を収集した。石渡は現地住民と生活を共にしながら彼らの生活スタイルを学んだのである。最前線の戦場で体得した経験と知識（言語も含む）が頼りであった。

戦後、憲兵司令部が編纂した書物に、「占領地に於ける諜報宣傳要領」と題して、憲兵の懐柔工作の心得が記載されている。心得の要は、「人心の機微に投ずるに在り」とある。さらに物質的な懐柔策は多大な経費がかかり持続が困難だが、言論による懐柔策は広く恒久性を有し、偉大な実績を伴うと謳っている⁽⁶⁶⁾。しかしながら、人心の機微を掌握し、適正な言葉かけによって懐柔工作を成功させるには、諸民族の習慣や風俗を軽視する、日本軍の一律化した型どおりの訓練や教本に基づいた諜報活動では自ずと限界が生じるだろう。現地住民への諜報活動は、予期せぬ偶発的要素に臨機応変に対応できる柔軟性と、人間同士の心の内面に関わる、多分に諜報活動員の人的な資質に負うところが大きかったと言わざるをえない。

『日本憲兵正史』の中で、英軍もまた現地住民を懐柔し、防諜戦に利用していたことが指摘されている。スパイ・防諜などの諜報活動においては、英軍諜報機関は長年の巧妙な植民地政策から得た経験を生かして、現地住民を親英的に懐柔する策術は、日本軍諜報機関のそれをはるかに上回っていた。ビルマでの英軍の謀略は、英国人指導の下に現地人が主

体となり、日本軍の占領地の諜報、後方攪乱等が行われた。典型的な例は、キリスト教徒で親英的なカレン族を利用した諜報戦があった。憲兵は、これらの謀略に対し、寡少兵力を以て、ビルマ全土にわたって優秀な英軍諜略網に対峙し、各作戦軍の背後にあって地味な活動をつづけた⁽⁶⁷⁾。大規模で組織的な英軍諜報に対して、寡少兵力と物資で相手の謀略に対応せざるをえない日本軍の諜報活動の実態が明らかになるだろう。

ビルマ戦線の敗退の原因を、軍上層部による補給無視の杜撰な作戦計画にだけ求めるのではなく、情報不足による事実認識の甘さや誤りがビルマ戦線の敗退を招いた一因であったことを最後に指摘しておきたい。

石渡は、前線での諜報任務は苦勞の連続だったと語った。

「後方にいりゃ楽ですよ、逃げる時も一番先に逃げたんですからね。残されたのは私ら前線回りの者で、わりに合わない事ばかりでしたが、その代わり『見られないもの』を見ました。⁽⁶⁸⁾（『』は筆者）

石渡がビルマで見た「見られないもの」を語ってくれたがゆえに、私たちは「知りえない史実」を知ることができたのである。

戦後、石渡は拘留中の1946年7月15日午前6時半頃、ラングーン中央刑務所の2階の格子窓より、偶然、BC級戦犯（カラゴン村事

(65) 石渡の聞き取り（2010年5月26日）。

(66) 憲兵司令部編『日本憲兵昭和史』原書房、1978年、135頁。

(67) 全国憲友会連合会編纂委員会編『日本憲兵正史』全国憲友連合会本部、1976年、1005頁。

(68) 石渡の聞き取り（2010年6月18日）。

件)の3名の将校の処刑場面(銃殺刑)を目撃⁽⁶⁹⁾した。1945年7月上旬、第33師団(弓)歩兵第215連隊第3大隊は、ビルマ東南部モールメン地方のカラゴン村で、女、子供を含む600名以上の住民の虐殺を強行した。カラゴン村事件は、ビルマにおける最大の住民大量虐殺事件として、英軍のBC級戦犯裁判にかけられた。この事件では6名の憲兵隊員が被告となり、3名に有罪判決が下った⁽⁷⁰⁾。戦時期の石渡の現地住民に対する巧妙な懐柔策が、結

果として彼が戦犯を免れた最大の要因となった。だが石渡も、命令次第では目前で銃殺された3名の将校と同じ運命を辿っていたかもしれない⁽⁷¹⁾。

石渡憲兵曹長は、⁽⁷²⁾1947年4月にラングーン中央刑務所を出所後、アーロン収容所を経て、同年8月に復員した。

(神田外語大学非常勤講師)

(69) 『サンデー毎日』(1980年8月31日号)に、石渡と同じ光景を牢内で見っていた、第18師団第55連隊第1中隊の陸軍歩兵軍曹石橋正巳の証言が掲載された。石橋軍曹は、1943年6月から「補助憲兵」としてビルマ地区に派遣された。補助憲兵とは正規の憲兵のような司法権は持たないが、諜報活動においては正規の憲兵と同等の任務を行う。石渡軍曹(現磯部)と石橋軍曹は戦後も面識はないが、両者の証言より同じ牢内の格子窓から処刑現場を目撃していたと推測できる。カラゴン村事件については、岩根承成「BC級戦犯裁判にみるビルマ・カラゴン村事件——裁かれた高崎215連隊」『共愛学園前橋国際大学論集』第7号、77-117頁(2007年別冊)で詳しく検討されているので参照されたい。

(70) 岩根前掲書、82-84頁。

(71) 既述の3名の将校ともう1名、第215連隊第3大隊長市川清義少佐の4名が処刑された。市川少佐は1946年7月15日午前6時に、3名とは別の場所で絞首刑に処された。

(72) 1945年6月1日に石渡は曹長に任官していたが、そのことを石渡自身は終戦まで知らなかった。